

ユネスコスクール年次報告書

報告期間：2012年4月～2013年3月

※今年度の年次報告書は担当者の名前、メールアドレス、添付資料を除き、HP等で公表  
します。また、ユネスコスクールの質の確保の観点から、報告書の内容が一定の基準に満  
たないもの、報告書が未提出の場合には、ユネスコスクールの認定取消を勧告させていた  
だきますので、あらかじめご了承ください。

1. 学校概要

学校名  栢山女学園大学附属小学校   
種別  保育園・幼稚園  小学校  小中一貫教育  
 中学校  高等学校  中等高等学校  
 教員養成  技術/職業教育  
 その他 ( )  
住所  〒464-0832   
 名古屋市千種区山添町2丁目2番地   
Website :  http://www.sugiyama-u.ac.jp   
児童生徒数：男子  0  名 女子  341  名 合計  341  名  
児童・生徒の年齢  6  歳～  12  歳

2. 担当者

3. 実施活動（複数選択可）

- 地球規模の問題に対する国連システムの理解
- 国際理解
- 世界遺産
- 平和・人権
- 環境
- 気候変動
- 生物多様性
- エネルギー
- 防災
- 食育
- 伝統文化
- そのほか ( )

#### 4. 活動概要

1年間の主な活動内容について簡単に記載願います（欄が足りなければ、添付資料をつけていただいても構いません）。

##### 稲作の実践

###### 1. 実践の概要

今年度、椋山女学園附属小学校（以下、本校）では、校舎屋上で米作りをおこなった。過去にも米作りはおこなわれていたが、数年間実施されていなかった。以前おこなわれていた米作りは、バケツで稲を育てる形式のものであったが夏期休業中の水の管理が大変であり、担当の教師にとっては敬遠したくなる学習内容であった。今年度の米作りはそのような水の管理の負担を軽減し、かつ、異学年交流を伴う形式にした。そして、来年度以降、お米を通した他地域との交流につなげていきたい。

###### 2. 小学校の米作りの学習

小学校の学習内容では、1, 2年生の生活科の「はなややさいをそだてよう」の単元が、5年生の社会科の「わたしたちの生活と食料生産」の単元が、米作りに関係する学習内容である。しかし、生活科では、アサガオや野菜の栽培が中心であり、昨年度まで数年間米作りの学習をしていない。また、社会科では農家の米作りの作業を学ぶが、実体験において水田を継続して見たり、農家が作業する様子を見たりすることがない児童が多いために、作業の内容をよく理解できないという心配があった。

そこで、今年度は試験的に、2年生の児童全員と5年生の児童の一部で田植えをし、2年生5年生の全員で稲刈りをおこなった。

###### 3. 実験水田づくり

実は米作りをおこなう上で、まず心配したことは、夏期休業中の水の管理である。従来のバケツで稲を育てる形式では、バケツごとに給水する作業をしなくてはならないために、教師にとって負担が大きい。本校は私立なので、児童が当番で給水することも難しい。自動給水機を使用しても、配水装置が大変複雑である。

そのため、まず、本校のビオトープの小川の中に、実験水田を作ることを考えた。本校は1891年の地形図で確認したところ、ため池の上流部にあたり（森, 2011）<sup>1</sup>、現在も校舎の地下からの湧水がある。本校のビオトープではこの湧水を利用して、小川を再現している。仮にここに実験水田を作れば、水の管理は容易であろう。しかし、このビオトープには樹木が多く、日当たりが悪いという問題がある。

次に、大型のプラスチック容器（いわゆるトロ舟：80L）を使って棚田状の実験水田を作ることを考えた。トロ舟は、建築工場の現場でコンクリートをこねるときに使われるので強度は充分あり、例え児童が複数入っても破損の恐れがない。校舎屋上に設置すれば、日当たりはよく、棚田状にしてあるので水の管理も簡単におこなえる。また、2011年度から本校が参加している名古屋市東山動物園主催のメダカ里親プロジェクトの一環で飼育しているメダカの水槽も同じ場所にあるので、「水田とメダカ」という複合型の学習活動も期待できる。結局、2012年5月にトロ舟を使った実験水田を作ることにした。

はじめに、トロ舟を階段状に配置して、最上流のトロ舟の側面に穴をあけ、

パイプを通して次のトロ舟に水が流れるようにした。さらにそのトロ舟にも同様の加工を施し、合計 5 段にした。次に、以前バケツで稲を育てたときに使用していた水田の土を運びこんで、トロ舟に入れた。最上段のトロ舟に水道の水を入れると、次々と下流に向かって水が流れ出し、全てのトロ舟を水で満たすことができる。最後に水道の蛇口に自動給水機を設置した。これで夏期休業中に毎日水の管理をする必要がなくなった。

#### 4. 2年生と5年生の米作り

5月末に実験水田が完成し、それから初めて2年生の担任と5年生の担任に、米作りの学習を計画しないかと提案した。通常ならば年度初めにそのような提案をするのだが、今回は実験水田を5月に作ったこともあって、断られるのを覚悟の提案であった。しかし担任らは、あまり時間が取れないが、米作りを体験することは児童にとって大変重要であるからという理由で了承いただいた。

まず、2年生児童は種もみ（「日本晴」「コシヒカリ」「あいちのかおり」）を見て、これがお米を実らせる稲になることを知り、水の中に浸した。数日後、発芽を確認し、日なたで苗が成長するのを待つ。そしてさらに3週間後に実験水田で田植えをした。5年生は授業時間が確保できなかったため、休み時間に10名程度の希望者が田植えをした（写真1）。

その後、田植えを終えた実験水田にメダカの稚魚を入れ、飼育する試みをした。稚魚は、元気そうに泳いでいたが、水深が5cm程度だったので、7月の下旬の昼間に短時間だが干上がってしまい、稚魚の姿は見られなくなった。このときは偶然に干上がってしまったが、米作りの工程に「中干し」というものがあり（佐伯剛正, 2007）<sup>ii</sup>、メダカが避難できるような場所を確保することは来年度以降の課題である。

自動給水機によって、夏期休業中に特に水の管理を教師はしなくてもよく、稲は順調に育っていった（写真2）。早いものは8月の中旬に開花が確認された。

9月下旬から10月上旬にかけて、2年生と5年生が鎌を使って稲刈りをおこなった。その後、椙山女学園大学の石橋教授の指導のもと、自分たちが収穫したお米も用いて、2年生と5年生が参加した「いのちの授業」がおこなわれた。（写真3・4）

#### 5. お米作りによる交流

私（森）が8月に北海道を旅行したときに、偶然立ち寄った旧島松駅通所（北広島市）の展示で稲穂を見つけた。施設の職員に説明を受けたところ、この駅通所を運営していた中山久蔵氏（1829～1919）は、石狩水田の祖と言われた人物で、彼が明治初期に栽培に成功した「赤毛種」と呼ばれる稲を現在も地元の方や小学校が栽培しており、その稲穂であったことがわかった。中山久蔵氏は44歳の年齢で一念発起して農業を志した（北国諒星, 2010）<sup>iii</sup>。

私は施設の職員に、この稲藁を名古屋の小学校に持って行って来年栽培したいので、譲ってもらえないかとお願いしたところ、快く譲っていただけた。寒冷地の稲を、名古屋で育てることができるのかわからないが、これをきっかけ

に、本校の児童が北海道の児童とお米を介して交流できるのではないかという期待を持ったからだ。

このアイデアは、北海道に限らず、稲作可能な地域なら世界各地に応用できる。名古屋近郊で栽培している稲と、各地の稲を交換して栽培し、成長の記録を互いにやり取りするうちに、それぞれの地域の、気象を含む自然環境や稲作を通じた文化の違いに児童は興味を持つ可能性が高い。ただ、相手があることなので、すぐに交流という形は取れないかもしれず、一方通行的な関わりしか持てないかもしれない。

さらに、本校の宇土泰寛校長がアフリカのブルキナファソでインディカの種もみを入手したので、来年は、このインディカと「赤毛種」を本校で栽培したい。(写真5)



活動時間について（下記から選択して下さい。）

- 通常の授業時間を使用（総合的な学習の時間を含む）
- 時間外活動の時間を使用
- ユネスコクラブの活動として実施
- その他（ ）

活動の内容を補完する以下の資料があれば添付願います。※公表しません

- 紙媒体の参考資料（新聞、出版物など）
- CD-ROM
- 写真
- その他（ ）